

山形県立保健医療大学における 看護学科国際交流事業の検討(第1報)

遠藤 芳子¹⁾・後藤 順子¹⁾・市川 禮子¹⁾
平塚 朝子¹⁾・井上 京子¹⁾・片桐 智子¹⁾
長浦 レイコ¹⁾・原 萃子¹⁾・二口 尚美²⁾

An Examination on International exchange conducted by the Yamagata Prefectural University of Health Sciences (The 1st Report)

Yoshiko ENDO¹⁾, Junko GOTO¹⁾, Reiko ICHIKAWA¹⁾
Asako HIRATSUKA¹⁾, Kyoko INOUE¹⁾, Tomoko KATAGIRI¹⁾
Reiko NAGAURA¹⁾, Atsuko HARA¹⁾, Hisami FUTAKUCHI²⁾

Abstract : One of the educational objectives of YPUHS (Yamagata Prefectural University of Health Science) is to improve student's international vision and instilling in them the ability to take an active role in international affairs. In order to achieve this objective, each department (Nursing, Physical Therapy, Occupational Therapy) have progressed by forming their own international exchange committees.

In 2002 (Heisei 14), with respect to the nursing department, one of the many organised activities undertaken was to forge a relationship with the UCHSCSN (University of Colorado Health Sciences Center, School of Nursing) through projects concentrating on international exchange, mutual understanding and the exchange of information pertaining to nursing education and research. These projects enhanced our mutual friendship and extended the grasp of knowledge on recent trends in nursing experienced in the USA. They also contributed in the deepening of the student's sense of internationalism and ideas on individual contributions to the community.

This college has invited visiting lectures from Colorado for open discussions with teachers at YPUHS, to give lectures to teachers, students and other nurses employed in Yamagata, and also to give talks on specific subjects to the students of YPUHS. The results of all these projects have largely met the objectives mentioned earlier.

In the future, we would like to promote an initial working plan after consideration on the possibility of recognition for study units on attending talks from visiting lecturers, and the kinds of materials and translation required, coupled with travel arrangements for the visiting lecturers.

Key Words : International exchange, mutual understanding, sense of internationalism

1) 山形県立保健医療大学 保健医療学部 看護学科
〒990-2212 山形市上柳 260
Department of Nursing, Yamagata Prefectural University
of Health Sciences
260 Kamiyanagi, Yamagata 990-2212, Japan

2) 東北大学大学院医学系研究科国際保健学分野(博士課程)
〒980-8575 宮城県仙台市青葉区星陵町 2-1
Tohoku University, Graduate school of medicine, Division
of International Health (Quality & Health System)
2-1 Aobaku Seiryochō, Sendai Miyagi 980-8575, Japan

はじめに

山形県立保健医療大学（以下，本学）の教育目標の項目の一つに「国際的視野を持ち，活躍できる人材の育成」が挙げられている。その目標を達成して行くために，本学では，国際交流委員会を立ち上げて国際交流をすすめている。

本学看護学科では，2001年（平成13年）2月にアメリカ合衆国コロラド州コロラド大学保健科学センター看護学部（University of Colorado Health Sciences Center School of Nursing，以下，協定大学）と国際交流の協定を結び，平成14年度から看護学科の国際交流事業活動が始まった。

平成14年度の看護学科国際交流事業においては，招聘事業（看護教員間フリー討議，講演会，看護学生対象の講義）と看護学生海外研修が企画された。

今回の山形県立保健医療大学における国際交流事業の検討第1報では，招聘事業について経過を述べるとともに検討した結果を報告する。

招聘事業は，協定大学の看護学部の教育の概要を知りたいという目的で看護学部博士課程責任者である Magilvy 教授を招聘し，さらに，この機会に Magilvy 教授の専門としている地域看護学，農村看護学，高齢者ケアなどの研究について，講義やフリー討議を通して互いの理解を深める目的で設定した。各事業は以下の目的で実施した（記載順序は開催順序による）。

- 1．大学間の看護教員間フリー討議では，両大学の看護教育や研究に関する情報の交換を行なうとともに，相互理解と友好を深める。
- 2．Magilvy 教授による招聘講演会では，本学教員，学生，および山形県内看護職者を対象とし，アメリカの最近の看護の動向を知る。さらに，国際感覚の育成と地域に開かれた大学としての役割を果たす。
- 3．看護学生対象の講義では，コロラド大学保健科学センター看護学部の教育の実際について講義を受け，学生の国際交流の必要性に対する喚起を促す。

教員組織

山形県立保健医療大学国際交流委員会が立案した事業計画に基づき，看護学科では役割を分担し，

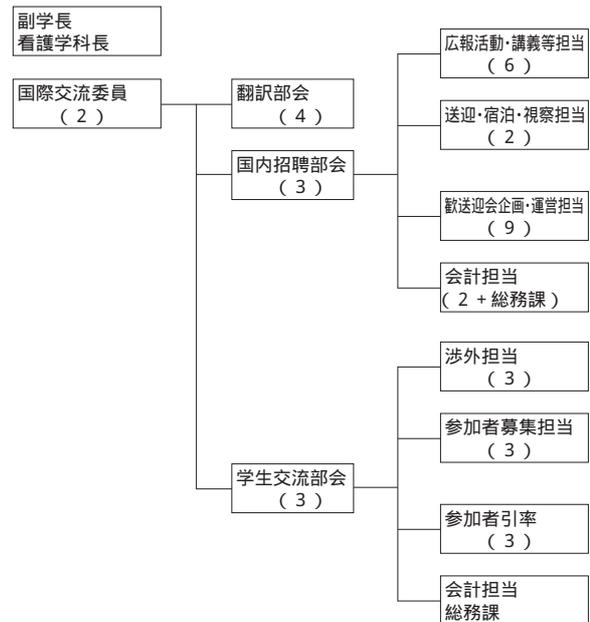


図1 平成14年度看護国際交流教員組織
注：各担当にはリーダーを1名置いた。
()内の数字は担当者人数である。

教員組織を構成した（図1）。

[各事業でのアンケートの実施内容と倫理的配慮]

講演会と講義の終了後，今後の国際交流事業に反映させるため参加者からテーマ，講師，内容，時間，会場，講演や講義への感想，今後の希望についてアンケートをとって検討した。倫理的配慮として，アンケートをとるにあたっては，無記名とし，個人が特定されないこと，この報告以外に使用しないことを約束した。

招聘事業は Magilvy 教授の了解を得てビデオ収録，写真撮影している。

[各事業の実施経過と結果および考察]

1．看護教員間フリー討議

平成14年6月11日（火）10時から11時50分と6月13日（木）9時30分から10時30分の2回実施された。信州大学医療技術短期大学部看護学科麻原教授がコーディネーターとして同席して行われた。本学看護学科教員は27名の参加であった。はじめに Magilvy 教授の研究に関する講義があった。その後，教員間の討議が行なわれた。

1) 講義内容

Ethnography（質的研究：以下エスノグラフィ）の目的，概観，特性，デザインの種類，手法，公衆衛生看護への応用についての講義であった。

2) 「看護教員間フリー討議」の結果

概観, 質的研究デザイン, 質的研究で用いられる方法, データ収集, データ管理, データ分析, 問題点, 地域看護活動にいかにして応用していくかの講義内容の確認と文化的背景に基づく手法の短所などについて質問や討議が活発に行われた。さらに, コロラドや日本との看護教育や看護師のおかれている立場などの違いについても自由な意見交換を行なった。

3) 「看護教員間フリー討議」の考察

看護教員を対象として実施された事業であったが, テーマが Magilvy 教授の研究テーマであるエスノグラフィであり, その実践を聞くことによって研究の具体的な考え方や手法, エスノグラフィが, 地域特に農村部における文化的背景が異なる住民集団を把握分析し看護活動にどのように生かしていくのかを学ぶことができた。また, Magilvy 教授と本学教員間の自由な意見交換の場がもてたことは, 国際交流の本来の目的である「国際的視野を持ち活躍できる人材の育成」における教員の役割の認識向上につながったと考えられた。

2. 招聘講演会

平成 14 年 6 月 11 日(火)15 時から 17 時まで「アメリカの看護の現状と問題点 在宅看護を中心に」と題して実施された。

対象は, 山形県内看護職員とし, 県内の 25 施設から合計 53 人の参加があった。

1) 講演内容

講義はコロラド大学保健科学センター看護学部の概要とアメリカの看護の現状と問題点(在宅看護を中心)についての内容であった。

コロラド大学保健科学センター看護学部の概要

コロラド大学保健科学センター看護学部の教育は 1898 年に開始され, 4 年制大学の教育では西アメリカでは最も古い大学のひとつで, アメリカにおいてナース・プラクティショナーのプログラムの草分け的存在である。学部課程(学生数 272 人), 修士課程(学生数 218 人), 博士課程(学生数 49 人)が開講されており, 教職員数は教授 13 人, 助教授 27 人, 講師 21 人, 助手 30 人のほか 100 人の実習を担当する教員がいる。看護学部の教育の方針は, 実践, 研究と教育であり, 1・2 年で教養科目, 3・4 年で専門科目を

開講しているほかに, 遠隔教育として On-line による教育も開講されている。

アメリカの看護の現状と問題点 在宅看護を中心に

アメリカにおける公衆衛生看護師と在宅看護師の活動には相違がある。公衆衛生看護師は, 健康づくりと疾病の予防について, 看護や社会学, 公衆衛生の知識をもとに, 地域をベースに住民に活動の焦点をあてて実践している。公衆衛生看護師は, 学士の教育で公衆衛生のスタッフ, 大学院修士課程卒業者は公衆衛生の専門家となり, 農村部と都市型の活動に分類され, クリニックや学校保健, 在宅ケアや地域看護活動, 感染症対策や環境保健にもかかわる。在宅看護師は, リハビリテーションや急性期の看護, 慢性疾患の看護, 緩和ケアなどを担当し, 産婦, 新生児, 慢性疾患を持つ人, 高齢者などが対象になる。しかしアメリカの医療費は高価で, 多くの医療保険を持たない人, ホームレスやエイズなどのボランティアを必要とする人がいる。最近では, 公衆衛生看護師による個人や家族への直接ケアが減少し, 住民全体に焦点を当てたケアが増大しているため, 公衆衛生看護師と在宅看護師との機能の分担が必要である。

農村部の高齢者と家族に対する在宅看護師の機能について, 12 年間エスノグラフィを用いての研究結果, 農村部の高齢者や家族は, 危機に陥ったときに在宅看護師の支援を必要とし, 在宅看護師は強力で彼らを支援していることが明らかになった。

2) 質疑と感想

会場からの質問として, 寝たきり者の割合, 公衆衛生看護師と在宅看護師の機能の混乱と機能分担の困難性, 男子学生の割合や看護職の実践についての質問, 医療保険の内容など, アメリカと日本の文化の違いに基づいた質問が多く出された。大学の規模の大きさと教育内容の充実について感想が述べられた。

3) 講演聴講後のアンケート結果

職種

参加者は, 看護学生 2 人(3.8%), 看護職 17 人(32.1%), 看護・理学・作業学科教員 34 人(64.2%)の合計 53 人であった(図 2)。

感想

テーマに対する感想は「訪問してどんなケアをしているのか詳細に知りたかった」「コロラドの公衆衛生活動の概略がわかったのが有益だった」「姉妹都市の看護の実際を知りたかった」「日米の看護の問題がほぼ変わらないのがわかった」などであった。

講師に対する感想は「温かい人柄が伝わってきた」「めったにお目にかかれないので光栄に思う」などであった。

内容に対する感想は「日本の訪問看護や保健の向かうべき道はアメリカ合衆国とは違う」「風土や価値観, 宗教の違いもある」「現在抱えている問題はわかったがどう乗り越えていこうとしているか知りたかった」「スライドや写真が織り交ぜてあってよかった」「パブリックヘルスナースとホームヘルプナースという地域の活性化と健康を守るシステムを学べた」「実践面も知りたかった」「テーマ部分をもっと聞きたかった」「日米のシステムの違いがわかった」などであった。

時間に対する感想は「時間を遅く設定すると参加者が多くなると思う」「途中, 休憩時間があって疲れなくて良かった」「ディスカッションの時間がとれて良かった」などであった。

会場に対する感想は「人数に合っていた」「わかりやすい案内表示にしてほしい」などであった。

今後のテーマ・講師・内容などの希望は「日本が抱えている問題点と比較できるようなテーマ」「保健医療に限定しないで一般的なテーマでいい」「老人ケアや農村看護学という内容を聞きたかった」などであった。

その他の感想は「資料を訳してほしかった」「通訳を介しての講演はわかりにくい」「看護学生や働いている看護職の参加ができるようにしてほしい」「看護学生が大変良い質問をした」「外国の看護については日本人の体験の講義がいい」「参加者が少なかった」「短時間ではつかみきれない内容だった」「わかりやすく良かった」などであった。

3)「招聘講演会」に対する考察

予定していたより参加者は少なかった。テーマが地域看護学であり, アメリカ合衆国における現状や問題点は, アメリカ合衆国の医療体制や文化

を知らなければ, 理解できにくかったと考えられる。聞く側のニーズと内容(テーマ)のずれ, さらに, 限定された内容は一部の対象者の興味にとどまるという点で国際交流の意義としては, 狭義のものとなった。しかし, アメリカ合衆国の最近の看護の動向を把握することができたことや国際感覚の育成につながったと考えられる。また県内の看護職者の参加により, 地域に開かれた大学としての役割を果たすことができたとも考えられる。

また, 講演会の資料が講演会の前々日に届き, 翻訳する時間がなかったことや, サッカーのワールドカップ戦があり通訳の手配が遅れたことなど, 十分な準備ができなかったことが反省として挙げられる。

3. 看護学生に対する講義

平成14年6月12日(水)13時から15時まで「コロラド大学における看護教育」と題して, Magilvy教授による, 本学看護学生と看護教員に対する講義が実施された。その結果, 183人の参加があった。

1) 講義内容

講義は, コロラド大学における看護教育プログラムであり, スライドを使って行なわれた。コロラド大学保健科学センター看護学部設置されているさまざまなコースおよびその概要や特徴について説明があった。概要は以下のとおりである。

看護学士教育についてはアメリカにおいて古い歴史を持ち, またナース・プラクティショナープログラムや日本の養護教諭に当たる職種者養成プログラムの設置は, 米国において初の試みであった。ワールド&ニュースレポートによって, 常にアメリカ合衆国における看護学部トップ10にランキングされている。現在では遠隔教育にも積極的に取り組み, 研究に重点を置く看護学部としてはアメリカ最高の教員数を誇る。

看護学生が入学するコースとして, 学士コース, ナーシングドクトレイト, 看護学修士コース, 看護学博士コースを持っている。学士コースにはすでに登録看護師の免許を持っているが学士を持たない者のためのコースもある。修士課程は「女性と健康」「プライマリー, 慢性期および急性期のケア」「集団, 医療システムと情報」などの専門分野に分かれており, そのほかに看護師免許を持つ

ナース・プラクティショナーや博士号取得を目指す学生のための特別コースがあり, またナース・プラクティショナーや CNS を取得できるコースもある。学部カリキュラムの考え方はジーン・ワトソン博士のケアリングの考え方に基づいている。

2) 講義聴講後のアンケート結果

参加者

参加者は, 看護学生 149 人 (81.4%), 看護・理学・作業学科教員 29 人 (15.8%) その他 5 人 (2.7%) の合計 183 人であった(図 2)。アンケートは 138 枚の回収で回収率は 75.4%であった。

講義のテーマ, 講師, 内容, 時間, 会場に対するアンケート結果は図 3 に示した。

テーマ

「良い」が 79 人 (57.2%) 「まあまあ」が 26 人 (18.8%) 「普通」が 25 人 (18.1%) 「どちらかという悪い」が 2 人 (1.4%) 「悪い」は 0 「無回答」が 6 人 (4.3%) であった。

テーマに対する意見として「コロラドの看護教育を知ることができてよかった」「日米の看護

教育の相違がわかってよかった」「学生向けではなかった」「学生には早すぎる」「学生がどのような勉強をしているのか知りたかった」「他国も同じことを勉強しているとわかった」「先端の看護学や文化にも触れてよかった」「大学そのもの話を聞きたかった」「国際交流していくのいいテーマだった」などが出された。

講師

「良い」が 124 人 (89.9%) 「まあまあ」が 8 人 (5.8%) 「普通」が 4 人 (2.9%) 「どちらかという悪い」と「悪い」は 0 「無回答」が 2 人 (1.4%) であった。

講師に対する意見として「明るい」「フレンドリー」「心が広い」「優しい」「わかりやすい」「学生をひきつける話し方」「看護を愛していると感じられた」などが出された。

内容

「良い」が 69 人 (50.0%) 「まあまあ」が 45 人 (32.6%) 「普通」が 21 人 (15.2%) 「どちらかという悪い」が 2 人 「悪い」が 0 「無回答」

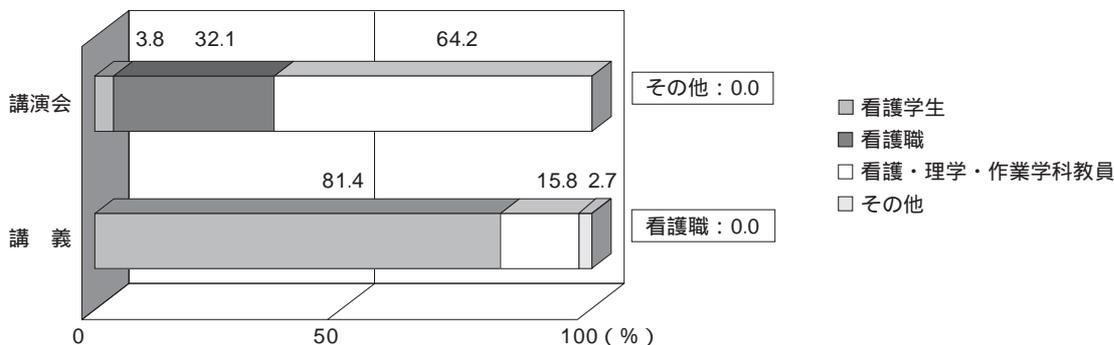


図 2 講演会・講義の参加

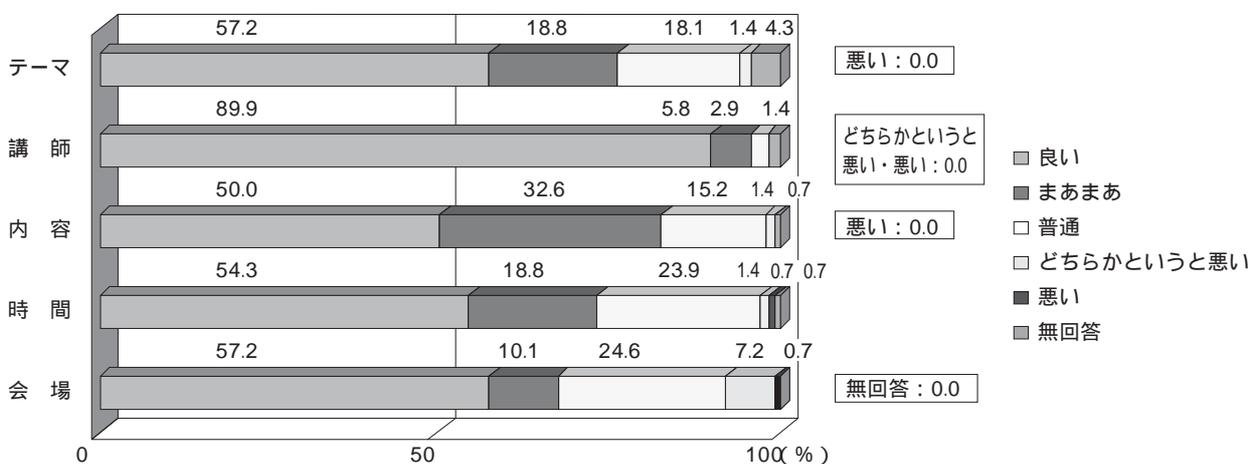


図 3 講義に対する感想

が1人であった。

内容に対する意見として「コロラド大学の教育の仕組み, 取得資格やコースの種類などが良くわかった」「自分の大学との相違がわかった」「姉妹校の様子がわかった」「学生向けではない」「わかりやすかった」「わかりにくかった」などが出された。

時間

「良い」が75人(54.3%)「まあまあ」が26人(18.8%)「普通」が33人(23.9%)「どちらかという悪い」が2人(1.4%)「悪い」と「無回答」が1人ずつ(0.7%)であった。

時間に対する意見として「ちょうど良い」「短い」「1時間くらいがいい」「ディスカッションの時間が多くてよかった」「途中, 休憩時間があって良かった」などが出された。

会場

「良い」が79人(57.2%)「まあまあ」が14人(10.1%)「普通」が34人(24.6%)「どちらかという悪い」が10人(7.2%)「悪い」は1人(0.7%)であった。

場所に対する意見として「暑かった」「冷房を入れてほしかった」「よかった」「反響がなく聞きやすかった」などが出された。

今後のテーマ・講師・内容などの希望

「コロラド大学の学生や授業内容や実習・日常生活について知りたい」「コロラド大学の学生の話を知りたい」「コロラドの病院や看護の現状(看護師の勤務状況・医師の立場・考え方の違い)について」「成人看護学や地域看護学をどう分けているのか知りたい」「マギルビィ先生の看護観」「コロラドの文化について」「アメリカの男性助産師について」「外国のターミナルケアについて」「専門的に深い話を聞きたい」などが出された。

講義に対する感想

「通訳が良かった」「通訳がわかりにくかった」「英語力をつけようと思った」「資料を訳してほしかった」「質疑応答が良かった」「講師, 大学の教員が良い環境を提供してくれた」などが出された。

3)「看護学生に対する講義」に対する考察

看護学生は1年生から3年生まで全員の参加であったので, 参加者は多かった。しかし, 当日は

山形特有の蒸し暑さで, 会場である講堂に冷房が入らず, 事前に冷房などに考慮が必要であった。

講師に対する看護学生や教員の印象はとてもよく, 楽しんで講義を聞いたとしている。しかし, 内容的には, 教育体制であり, 看護学生の本来聞きたいと意見があった「学生の考えや生活」にはやや遠い内容であったと考えられた。今後は, 単に外国の看護教育や学生の生活についての話を聴くということにとどめず, 岩崎ら¹⁾の報告にあるように, 講義受講として単位の認定なども考慮に入れていく必要があると考えられた。

この講義の内容についての感想が相反する意見が出ていることから, 講義テーマや内容の評価判断は難しいと考える。また, この研究の限界として, アンケート集計において, 経験の有無に関わらず, 看護学生や教員がそれぞれの立場で知識を習得するために実行したので全体を通した印象として一律に取り扱った点が上げられ, その点からも相反する意見が混在したと考えられた。

また, 看護学生の意見で「英語力をつけようと思った」ということから, 語学に対する学習への動機付けはなされたと考えられた。上林²⁾は「自分たちは何のために勉強, 研究しているのかといった目的意識を持たないと, 大学の進歩, 発展は望めない」と述べているように, 学生に対してこの事業がどんな目的で実施されたのかを明確に示すことが学生に対する動機付けや大学の使命を明確にすることにつながると考えられた。

通訳者に関しては, 最初決まっていた方のキャンセルにより, 多方面にわたり探した結果, 講演会前日に決まったため講演者との打ち合わせもほとんどないままに実施した結果がアンケートにも反映した。このことは「通訳付きの講義はとても難しい」という感想からもうかがい知れる点であった。

資料の送付が遅かったことで, 内容の理解が十分できないままで通訳して下さった通訳者には大変迷惑をかけたため, 資料は遅くとも10日前(内容の理解や資料の準備)には送付してもらうことが肝要であると考えられた。

結 論

今回の看護学科国際交流事業の一つである招聘事業は, 両大学の看護教育・研究に関する情報交

換, 相互理解と友好を深めること, アメリカ合衆国の最近の看護の動向を把握するとともに, 国際感覚の育成, また同時に地域に開かれた大学としての役割を果たすことという目的で実施された。

その目的を果たすために, 看護教員間フリー討議, 招聘講演会, 看護学生対象の講義を計画実施した結果, 本学看護教員, 看護学生, および, 山形県内看護職者の感想やアンケートなどから目的は果たされたものと考えられる。

事前準備については, 資料の準備と通訳依頼において初めてのことであり戸惑い, 準備不足は否めなかった。講堂や講義室の環境については, 季節や聴講者の人数を考慮に入れて準備することが肝要であると考えられた。

国際交流事業の成果については, この後企画されている看護学生海外研修の成果と併せて全体的に評価していくことが必要である。現段階は第1回目でもあり, 十分に検討のうえ企画されたものとは言い切れず, 今後は今回の結果を踏まえて良

好な結果が得られるように計画実施をしていきたいと考える。

看護学科の国際交流委員会では今回の反省を踏まえて, 事前協議や準備を充分整え, また, 学生に対して有利になる単位認定なども考慮し, 協定大学, 本学双方の看護学生および教員の満足度なども調査して, 今後の事業の計画を推進して行くことが望ましいと考える。

文 献

- 1) 岩崎弥生, 清水邦子, 石川かおり, 齋藤和子: 千葉大学看護学部 - アラバマ大学間の国際交流. Quality Nursing, 8(6) 17-26 2002.
- 2) 上林美保子: ハワイ大学における看護教育 (Japanese Faculty Development Program 研修報告). 岩手県立大学看護学部紀要, 3: 131-134, 2001.

2003, 10, 31 受稿, 2004, 1, 20 受理

要 旨

山形県立保健医療大学の教育目標の一つに「国際的視野を持ち, 活躍できる人材の育成」が挙げられている。その目標を達成して行くために, 本学では, 国際交流委員会を立ち上げて保健医療学部看護学科, 理学療法学科, 作業療法学科それぞれで, 国際交流事業を進めている。

平成 14 年度国際交流事業の一環として看護学科では, 本学と国際交流の協定を結んだコロラド大学保健科学センターにおける看護教育や研究に関する情報の交換や相互理解, および親善, アメリカ合衆国における最近の看護の動向の把握, 国際感覚の育成, 地域への貢献などを目的として, コロラド看護学部教授を招聘し, 看護教員間のフリー討議, 本学看護教員, 看護学生, および山形県内看護職者への特別講演, さらに看護学生への講義を実施した。その結果, 受講者の感想やアンケートなどからほぼ目的は達せられたと思われる。

今後は, 資料や通訳に関する準備と環境などの事前の整備, 講義の単位認定などにも考慮して事業の計画を推進して行くことが望ましいと考えられた。

キーワード: 国際交流, 相互理解, 国際感覚